



気軽に人を助け、助けられるのは 難関大の試験を解くより難しい



電化製品の類を購入するとめれなくついてくる「取扱説明書」。どういう状況でどこのスイッチを押せばよいか懇切丁寧に書かう想像すらしてしまいます。とりわけ一番「あったらなあ」と思うのは、「善意」の取扱説明書です。「困っている誰かに、適切に手を差し伸べる」というのはそれこそ難解な方程式を解くよりも難しいことではないでしょうか。電車に乗っている時、荷物を持ったお年寄りに善意から席を譲ったにもかかわらず、「年寄り扱いするな！」と怒鳴られたという経験がある人もいるでしょう。逆に、身体が辛くて仕方ないのに口にも顔にも出すことができず、日々の暮らしの中で不自由を感じ続けているという人も。それが積み重なって気遣いという名の善意が徐々に薄れていってしまえば、ますます暮らしにくい世の中になってしまいます。

肺の日のロゴマークキーホルダーや、はいまるくんキーホルダーによる意思表示は、たとえるならこの「取扱説明書」を明らかにすることにそっくりです。肺が悪い人と、肺の病気に理解のある人の双方が自らの立場を表明することで、適切な時に、気遣いを望む人へ手を貸すことができます。

こうした動きは、たとえ一個人の活動でも大きな意味があります。妊娠中であることを表す「マタニティマーク」も、普及したきっかけはたった一人の女性フリーライターによる活動でした。「妊婦さんが安心して生活できるようにしたい」という彼女の思いから 1999 年に産声を上げた世界初のマタニティマーク「BABY in ME」は、生きづらさを感じていた女性達やその家族の共感を呼び、最終的に国や地方自治体を動かすまでになったのです。その結果、20～30代女性の約7割、妊婦の9割以上が認知する、全国的な知名度を誇るマークとなりました（内閣府「平成26年世論調査」）。とはいえ、未だに中高年の男性などからはさほど認知されておらず、「マタニティマークをつける妊婦がムカツク」「妊娠なんか自己責任なんだから、他人に気遣いを求めるな」という心ない声がかかしこで聞かれます。加えて、ひったくりや強盗に狙われやすくなってしまうという理由で「マタニティマークをつけたくない」という女性もいる有様です。今後、どのような広報活動を通じて認知させていくか、またマタニティマークの例を受けて、こうした声にどのように対応していくかが広がりを生んでいくための鍵となると言えるでしょう。

「武士は食わねど高楊枝」のことわざに見られる通り、「何かあっても表に出さず我慢することが美德」というのが日本社会における風潮。だからこそ、お互い気兼ねなく手を差し伸べ、その手を取ることのできる流れを作り出していくことが必要です。ロゴマーク & はいまるくんキーホルダーによるアピールは、アポロ11号の月面着陸のごとく、その流れを作るための重要な一歩だと考えます。

文章：小泉ちはる

ライター兼漫画家。熊本県生まれ、東京大学経済学部卒。出版社での勤務経験を経て独立し、男性向け雑誌の特集や書評、企業へのインタビューを多く担当。漫画は「田丸こーじ」という筆名で4コマ漫画を中心に執筆している。三度の飯より統計と怪談とゲームとルネ・マグリットが好き。